Case 01

新潟県
佐渡島

佐渡から描く、次世代につなぐ農業と島の未来

株式会社naco
代表取締役
本間 涼

■高校球児たちの頑張りが島を熱狂させた

私の人生を突き動かす原動力は、一五歳の夏に見た光景にあります。佐渡島で兼業農家の息子として育った私にとって、田んぼや山は遊び場であり、生活の背景そのものでした。しかし、当時の私にとって、自然以上に熱中していたものがありました。それは白球を追う日々です。地元の佐渡高校に進学し、恩師・深井浩司監督のもとで過ごした高校一年生の夏。私たちは快進撃を続け、ついには夏の甲子園・新潟県予選の決勝まで駒を進めました。

結果は準優勝。あと一歩のところで甲子園の土を踏むことは叶いませんでした。しかし、敗戦の悔しさ以上に私の心に刻まれたのは、試合後に聞いた島内の様子でした。決勝の日、本土の球場には島から驚くほど多くの方々が駆けつけてくださり、島に残った皆さんもテレビの前で声を枯らして応援してくれていたといいます。「あの時、佐渡の道には車が一台も通っていなかったんだよ」。そんな言葉もかけられました。

高校生が、ただ一生懸命に野球を頑張っただけで、島全体をこれほどまでに熱狂させ、元気づけることができる。大の大人が涙を流して喜んでくれる。その圧倒的なつながりの力を目撃した時、私は

残したい佐渡の自然を背に子どもたちと。

プロ野球選手になって、もっともっと佐渡を盛り上げたいと強く心に誓いました。その想いを胸に、私は島を飛び出し、神奈川の大学野球の強豪校へと進学しました。

■自然と社会の「つなぎ手」として

大学四年の秋、明治神宮大会で全国準優勝という結果を残したものの、プロへの壁を痛感した私は、就職という選択肢を考え始めました。しかし、ここで自分自身のアイデンティティと都会の常識が強くぶつかります。

島では半袖・短パン・ビーチサンダル姿、常に土や潮風を感じて育った私にとって、リクルートスーツに身を包み、革靴を履き、自分を偽ってまで組織に合わせる就職活動は、どうしても受け入れがたいものでした。早々にリタイアを決めた私は、佐渡の先輩方を頼り、インターンを経て卒業後すぐに個人事業主として活動を始めました。そして、社会人一年目の二〇一六年、東京で研修事業を行なう「株式会社ｎａｃｏ（ナコ）」を創業しました。

社名の「ｎａｃｏ」は、私が考案した「Nature Connector（ネイチャーコネクター）」という言葉に由来します。野球部時代の経験から組織構築やマネジメントに関心があった私は、都会の殺伐としたオフィスで働く人々と、かつて自分が過ごしてきた佐渡の自然との「差」に着目しました。

都市にいると、人は無意識に自然を渇望します。私も例外ではなく、都会の公園で夜空を見上げ、なんとか「自然らしさ」を補給しようと足掻いていました。しかし、私から見ると、そこにあるのは誰かに管理された偽物の自然であり、命が循環する手触りはありません。

「社会がもっと自然から学ぶことができれば、組織はより良く、社会はより豊かになるのではないか」、そう考えた私は、自然と社会の「つなぎ手」として、自然体験を通じて組織や個人の在り方を問い直す研修事業を構築していきました。しかし、研修として自然を語るほどに、自分の中に一つの欲求が膨らんでいきました。それは、「語るだけでなく、自分自身がもっと深く自然を体感し、土に触れ、その命を体現できる場を持つべきではないか」という強い想いです。

■Uターンで見いだした島の価値

島へ戻ろうと決めたきっかけは第一子を授かったこと、そして世界を襲ったコロナ禍です。それらが私の背中を強く押し、「今こそ佐渡へ帰る時だ」と直感して、二〇二〇年に島に帰りました。

Uターンをして改めて気づいたのは、佐渡という島が

持つ圧倒的な生命の密度と、生活者としての心地よさでした。都会であれほど探し求めていた自然が、ここには当たり前のように、しかも森・里・海が密接につながった状態で目の前に存在しています。一歩外へ出れば、四季折々の壮大な景色、潮の香り、濡れた土の匂いに全身が包み込まれます。

幼少期には当たり前すぎて素通りしていたこの環境が、実はどれほど贅沢なものか。この全方位的な大自然に生かされているという安心感は、一度島を離れ、都会のコンクリートに囲まれた暮らしを経験したからこそ再発見できた、かけがえのない価値でした。

また、島のコミュニティの見え方も、以前とは違いました。ここでの交流は、お金や利益だけの関係ではありません。ご近所さんとの立ち話、親の代からの知り合いとの何気ないやり取り。一つひとつの出来事が点ではなく、太い線で結ばれており、それが面となりセーフティネットのように自分を支えてくれている。この温かなつながりこそが、人間が本来持っている豊かさの正体なのだと確信しました。

■ 見向きもされてこなかった宝の山

二〇二一年、自然栽培（無肥料・無農薬）の農業プロジェクト「イケベジ」を始動した際に、この「つながり」と「外の視点」の掛け合わせが最大の武器となりました。

まず、地域に根付いた「地縁」の力は圧倒的でした。島で農業を始めようと行動した時、多くの地元の先輩方が「涼がやるなら」と、手を差し伸べてくれました。田植えの計画がすでに固まっていた四月という時期であったにもかかわらず、田んぼを無償で貸してくださる方が現れ、不足していた農機具も周囲の尽力ですぐに揃いました。これは、両親や祖父母がこの土地で築いてきた信頼という貯金があったからこそです。

同時に、私はあえて「島の人間になりきらない」ことを意識しました。私は農業の素人であり、島外で異なるビジネスを見てきました。だからこそ、ベテランの農家さんなら非常識だと一蹴するようなプロセスも、フラットな目で見つめることができます。

その最たる例が、島内の未利用資源の活用です。佐渡の酒造りで排出される年間百トン以上の「酒粕」。養殖の「牡蠣殻」、そして冬の災害原因にもなる「放置竹林」。これらは島の人にとっては処理に困るゴミであり、当たり前すぎて目に入らないものでした。しかし、外の視点を持つ私には、これらが宝の山に映りました。

それが酒粕を窒素源に、牡蠣殻をミネラルに、竹チッ

プを土壌改良剤として生かした既存の栽培暦にはない、自分たちが信じる佐渡の循環を詰め込んだ米作りです。伝統を重んじる地縁を大切にしながらも、外からの風を吹き込む「ネイチャーコネクター」としての立ち位置。このハイブリッドな強みが、イケベジの独自性を形作っていきました。

■ 人との出会いが組織を強くする

毎年nacoで行なっている田植え体験イベント。

「イケベジ物語」において欠かせないのが、ともに働くスタッフたちの存在です。イケベジ開始当初、佐渡で栽培した米と淡路島の野菜を、東京の駒沢（世田谷区）に構えた自然栽培の八百屋で販売していました。その店頭に立っていたスタッフたちは皆、都会育ちです。そんな彼らを連れて田植えや稲刈りのツアーを企画し、佐渡を訪れる機会を増やしていったところ、驚くべきことにスタッフ全員が「佐渡へ移住したい」と言い出したのです。

彼らを突き動かしたのは、自然の美しさだけではありません。一番の理由は、佐渡の人々の温かさです。見ず知らずの若者たちを迎え入れ、手料理を振る舞い、家族のように接してくれる島の人々。その懐の深さに触れたスタッフたちは、都会での効率重視の働き方に疑問を感じ、佐渡で根を張って生きたいと願うようになりました。

現在のｎａｃｏの組織運営は、一般的な会社とは少し異なります。私たちの採用基準は「労働力の補填」的な考えではありません。「田んぼの面積を広げたいから人を雇う」のではなく、「この人と出会い、こんな得意分野があるなら、こんな仕事ができるのではないか」という、人と人との出会いを起点に事業を組み立てています。スタッフの「得意・好き・興味」をそのまま業務内容にスライドさせています。

私はよく「会社の目標は何ですか？」と聞かれますが、その時は「現状維持が目標です」と答えています。「現状維持＝退化」と、とらえる人もいますが、私は今の心地よい組織や環境を維持するために、時代の変化に合わせて自分たちも常にしなやかに変化し続け、不要なものは手放し、荷物も心も軽く保つという意味として使って

います。やりたいことをすぐに行ない、変化を恐れない。この柔軟性の高い組織こそが、佐渡という豊かな土地で持続可能な経営を実践していくための、私なりの答えです。

■ たどり着いた世界最高峰の頂

私たちが取り組む自然栽培は、非常に手間のかかる農法です。ただ、そこには確かな手応えがありました。最初は佐渡で前例がある品種の「亀の尾」や「在来コシヒカリ」から米の栽培をスタートしましたが、ある時、大阪の知人から「にこまる」という品種の栽培を依頼されました。にこまるは西日本向けの品種で、佐渡での栽培例はありません。しかし、「佐渡で作っている人がいないからこそ面白い」と、私たちは迷わず挑戦を決めました。

酒粕や牡蠣殻といった島内資源を活用し、土の力を最大限に引き出す栽培。手探りのなか、二年目となる二〇二五年、私たちは世界最大級の米・食味分析鑑定コンクールにおいて、約五千検体の中から、国際総合部門での最高金賞受賞という快挙を成し遂げました。さらに、ギネス世界記録にも認定されている「世界最高米」の原料米としても選出されたのです。

表彰式で名前を呼ばれた瞬間、心は激しく震えました。自分たちの想いが、数値と味覚の両面で客観的に認められた喜び。何より、ともに汗を流したスタッフ、支えてくれた家族、そして温かく見守ってくれた地域の先輩方の顔が次々と浮かびました。「新米農家であっても、島の資源を活かし、情熱を注げば世界と戦える」。その確信は、私自身の誇りとなり、島全体への恩返しの一歩となったと感じています。

米・食味分析鑑定コンクールで新品種「にこまる」が最高金賞を受賞。

■ 小さな未来の農家候補に自然の魅力を伝える

現在、私たちは生産規模の拡大に伴い、スマート農業への転換を強力に推進しています。自然栽培において最大の壁となるのは除草です。田植え後の一カ月間、私た

ちは泥にまみれ、膨大な時間を草取りに費やしてきました。しかし、私はふと「この時間を、もっと子どもたちのために使えないか」と、考えました。

二〇二六年一月、クラウドファンディングを通じて水田自動除草ロボットの導入プロジェクトを立ち上げました。「楽をするため」ではなく、「空いた時間を子どもたちへの教育や交流に充てるため」の投資です。この趣旨に賛同してくださった一四九名の方々から、四三〇万円を超える支援をいただきました。

私たちの事業のコンセプト「Farm to Social」は、農家だからこそできる社会貢献を意味します。今の子どもたちは、生活の中で自然や農業に触れる機会が激減しています。佐渡の子ですら、自然は身近であっても生活の一部ではない状況があります。

スマート農業によって創出した時間で、私たちは保育園児から大学生までを田んぼに招き、生きもの調査や農業体験を行なっています。土に触れ、泥にまみれ、そこで見つけた小さな命に驚き、輝く子どもたちの瞳。その光こそが、私たちが農業を続ける最大の動機です。島の子どもたちのうち一割でもいいので、「将来はかっこいい農家になりたい」と、思ってもらえる未来づくりに、私たちは本気で取り組んでいます。

■子どもたちに残したい佐渡の自然とつながり

私が一八歳で島を出た時、都会にはあらゆる情報や富があふれていましたが、私にとっての幸せの正解はすべて佐渡にありました。何もないかもしれない。けれど、そこには自分を表現できる豊かな自然があり、偽りのないつながりがある。

現在、二児の父となった私は、子どもたちに自分が「美しい」と感じるすべてを残してあげたいと考えています。トキが舞う多様な生態系、清らかな水、先人たちが築き上げてきた共生の知恵、そして地域の人々との深い絆。これらすべてが、私にとっての美しさであり、守るべき財産です。

佐渡は「遅れている場所」ではありません。むしろ、これからの時代が必要とする価値が詰まった「最先端の場所」です。この小さな島が世界と勝負できること、自分たちの暮らしを自分たちの手で美しく彩れることを、子どもたちに見せ続けていきたいと思います。

本間 涼（ほんまりょう）
一九九二年に佐渡の兼業農家の息子として生まれる。佐渡高校から大学時代にかけ、野球に打ち込む。二〇一六年に株式会社ｎａｃｏを創業。二〇年から同社で、佐渡で自然循環型農業を行なう「イケベジ」をスタート。現在、自然体験をベースとした企業向け研修や個人向けリトリートの受け入れも実施。家庭では二児の父親。